

暑気を吸いこんだ西横堀川が、とろりと流れる昼九ツ、廓の眠気を破る気ぜわしい声が「槌屋」に響いた。

「夏蝶かちよういてるかっ」

息せききって走り込んできたのは、道修町は薬種問屋の隠居にして、この見世の天神を最眞にする小西久平衛である。

常ならば四枚肩の駕籠を仕立てて来るものを、珍しく己の足で駆けて来たものらしく、太り肉の図体からは汗が吹き出している。雨に降られた赤蕪といった顔面を拭きながら、もう片方の手に四角い包みを提げていた。

「ま、且さん、小一升ほども汗搔かはって何ごとだす。夏蝶やったら二階うでっせ」

この家の女房が段梯子に目を向ける。

「呼んできてんか。早よ、早よ」

久平衛は勝手か尽ずくに座敷へ上がると、包みをといた。中から清楚な黒塗りの一椀が現れ、辺りの気配をしんと冷ました。

五十路のこの男、夏蝶が顔見世するなり、

一目ぞつこんとなり、孫娘の機嫌を取るごとく槌屋へ揚がりはじめて三年になる。

「なんと落ち着いた、行儀のよろしいお椀やこと。いまに奥おくつや艶も出まっしゃろな」

久平衛が差し出した椀を両手で包み、夏蝶はそれへ柔らかな目を向けている。きめ細やかなふつくらとした面差しは、薄暗い座敷に生った桃であり、その実いっばいに張った双眸は清らかに澄んでいる。

「おくつやて何や」

「へえ。使うてるうちに、だんだんと出てくる艶のことです。わてら鯖江の者もんは、越前塗の一番のあじわいや思てます」

「ほう、そら使うんが楽しみやな」

久平衛は上機嫌に言ったが、夏蝶は椀を見つめるうち、次第に長い睫毛を伏せてゆく。大きく息を吸い、ゆつくりと吐いて気を静めようとする様は、蝶が翅を休める姿に似ている。

「どないした。なんぞ気に障ること言うたか」

「すんまへん。眺めてたら父母のことを思い出しましたんや」

嘘ではなかった。が、父母の顔が浮かんだのは一瞬で、夏蝶を切ない気持ちにさせたのは、今も椀の底に消えぬ一人の職人の顔だった。

「なんちゆうことあらしまへん」

夏蝶は語尾を釣り上げて、晴れやかな顔を拵えた。

「そうか。なんやしんみりさせてしもたな。その代わり、今度はちよつと趣向の凝らした品持もんってくるよつてにな」

と万事こういう具合で、これまで久平衛が夏蝶のために取り寄せた越前漆器は、すでに両手に余る数にのぼっている。女の懐郷を慰めんと張りきって、裏目に出たのはこれが初めてだった。

月の晦日が近づくと、夏蝶は禿かむろ（上級遊女の卵）を連れて三津寺詣みつてらで出かけるのが習いとなっていた。ひと月の無事を報告し、翌

月の繁盛を祈願する。帰りに門前の飴屋に寄って、朔日の紋日に揚屋に配る蝶形の飴細工を贖^{あがな}う。それが夏蝶にとって、廓暮らしのただ一つの息抜きであった。

その日も、東の大門を出て新町橋を渡ると、景色は映え、心は躍った。見世の若い衆が日傘を差しかけ、番をしいしいについては来るが、廓の外でする呼吸^いは肺腑^きに緑の風を送る清々しさがある。禿の足も浮かれ、下駄の音さえ丸く響いた。

参詣を終え、一行が飴屋へ顔を出すと先客があつた。菅笠を被り、尻端^{はしよ}折りした後ろ姿が目籠に飴を選っている。鶴に亀、大小の魚を模したのや、菊や梅といった花を形どつたものまで、この店の細工は大人にも人気があつた。男は最後に店の奥に取り分けられた、蝶形の飴を指して言った。

「そいつも一つ足してくれないか」

その声に、夏蝶の目は男の背中に吸い寄せられた。

「あいすまんことですが、これはお得意さんの特注品でおまして、お売り致しかねます」
詫びる飴屋に夏蝶が口を挟んだ。

「かましまへん。分けたげなはれ」

飴屋が恐れ入るのと、男が振り向くのが同時であった。いつとき蟬しぐれがやみ、夏蝶と男の頬を撫でるように風が抜けた。

「しづ…」

吃驚の面もちで、男はうわ言のように夏蝶を呼んだ。

「お久しゅうございます」

女の声にも顫えが混じった。三津寺の利益か、それとも罰か。その昔、行く末を誓い合った二人の眼差しが、潤みを帯びてもつれあっていた。

こましゃくれた禿が、喉が渴いたと機転を利かし、筋向いの水茶屋を指さしている。天神は若い衆も引き連れて、男を門前の茶屋へと促した。

男の名は常吉。夏蝶より四つ歳嵩の二十五

で、若いが腕のたつ蒔絵職人である。親許の貧苦を救うため、しづと呼ばれた娘が人買いの手を経て大坂新町へ流れて来たのが五年前。胸の奥深く、とうに消えたはずの埋み火が、二人の胸を焦がしはじめていた。

大坂へは遊山かと尋ねる夏蝶に、常吉は好事家に雇われての「十日奉公」と応えた。蝶を主に際立った意匠の蒔絵を所望され、過分な手間代に路銀まで受け取って、雇い主が住まう大坂へ来たという。

「それで意匠は決まりましたんか」

「いや。筆を持つても一向に浮かばない。手がかりを求めて街へ出てみたが、大坂は蝶とは縁遠い土地のようだ」

常吉は口惜しさをにじませた。

「大坂の蝶はなあ……新町に舞うてますのやで」

うつむいたままの夏蝶がつぶやき、懐から、顔見世のおりに楼主が揚屋に配った名入りの手拭いを取りだした。渡された男の目に蒼

白い光が差した。

「故郷を出るとき、常さんの手伝いは一生叶うまいと諦めてましたけど、ここで逢うたが百年目。廓の蝶を描いてはくれはらしまへんか」

幾日でも身揚げりする覚悟はついていた。
入^か費^{かり}の心配はいらない、と夏蝶は男の手に白い手を重ねた。それから、二人に見とれている禿に、やわらかな、けれど、やや長い視線を送った。

——よろしいな。賢うしときなさいや。
上目づかいに天神を見た禿は、コクリと顎を引く。茶屋の入り口で待つ若い衆にはもちろんのこと、見世の者にも他言を禁じた姉女郎の目を、利発な禿は瞬時に解したようだった。

その日の宵、常吉は東大門をくぐって、夏蝶に教えられた揚屋に入った。東西随一の派手さを誇る新町の揚屋で、酒宴というには甚だ貧弱な酒盛りをし、「槌屋の夏蝶」と名指

しした。

揚屋から槌屋に男衆が走った。見世先で「夏蝶天神お名ざしでございます」と叫んだあとで、男は小声でつけ足した。

「ただし、赤児の行水でおます」

懐の涼しい客を、盥たらいで（足らいで）泣いてる、と洒落で告げたにもかかわらず、夏蝶は「承りました」と丁重に返した。男衆はあめぐりと口を開けたまま帰って行った。

廊中が仰天したのは、それからだった。初会の客を夏蝶は槌屋へ連れ帰り、自室へ迎え入れたばかりか、そのまま居続けさせたのである。槌屋の楼主も香車かりてもさぞ熱いりたつものと思われたが、存外、知らぬ顔を決め込んでいた。

三日たち、五日がたって、常吉はようやくやぐ廊を去った。後朝きぬぎぬは心から涙にくれたが、その後はいつそ夏蝶の心は晴れていた。十日たち、ひと月がたって、三津寺詣でが巡ってき、その夜、久方ぶりに久平衛が登楼した。

「長い夏風邪でえらい目に遭うた」

と言うものの、その顔は息災そのもの。

知らなかったとはいえ、見舞いを遣わさずにいた無礼を夏蝶が詫びると、久平衛は「それよりな」と相好を崩した。

「約束どおり、今日はちよつとした品もん持って来たんや」

久平衛が包みをとくと漆香が立った。どこまでも黝くろく澄んだ鏡台と煙草盆に、蒔絵で蝶が描かれていた。夏蝶は息を呑み、こぼれるような眸で久平衛の面を凝視した。

鏡台には彼岸花で翅を休める蝶が、煙草盆には睡蓮のまわりを舞ういくつもの蝶が描かれていた。

一本いっぽんの翅脈しみやくからは、妖艶な息づかいが伝わってきて、可憐に舞う姿には命湧きあがる悦びが感じられた。まるで蝶の体温を感じとり、指先で鱗粉に触れたかのような描写が活きていた。

「よほど一心に打ちこんだんやろ。それが分

かる出来栄えや」

満足な表情の内にも、久平衛はどこか寂しさを隠せない。見つめる夏蝶の唇が顫えた。

いっぞやの夏の盛り、黒塗りの椀に愁いの目を向けた天神に、察するところのあった久平衛は、鯖江に人を遣わした。そして、心ならずも裂かれたしづと常吉のことを知るや、常吉を大坂に呼び寄せた。槌屋が廓のしきたりを曲げ、一見客の居続けを黙認したのも、五十男の意地から出た計らいであった。

「趣向というより、ちよつとてんごが過ぎたかいな」

「へえ。もうちよつとで三津寺はんの罰が当たるところでした」

微笑む女の頬に、泪が一筋走り落ちていた。

以来、久平衛は新町遊郭きつての粹客として、「老いらくの粹か甘いか恋の味」と囁されつづけた。夏蝶は夏蝶で、年季明けまで三津寺詣でをかかすことなく、奥深い艶を湛えた遊女になったという。